



ジャポニスム期のフランスにおける日本陶磁器コレクションの形成 : 日本陶器への開眼と交易の展開

今井, 祐子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2004-03-31

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3061

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003061>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 2 4 3 】

氏 名・（本 籍） 今井 祐子 （ 富山県 ）

博士の専攻分野の名称 博士（学術）

学 位 記 番 号 博い第494号

学位授与の 要 件 学位規則第4条第1項該当

学位授与の 日 付 平成16年3月31日

【 学位論文題目 】

ジャポニスム期のフランスにおける日本陶磁器
コレクションの形成
—日本陶器への開眼と交易の展開—

審 査 委 員

主 査 教 授 吉田 典子

教 授 三木原 浩

教 授 小高 直樹

国際日本文化研究センター助教授 稲賀 繁美

京都工芸繊維大学助教授 樋田 豊次郎

論文内容の要旨

氏 名 今井 祐子

専 攻 コミュニケーション科学

指導教官氏名 吉田 典子 教授

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

ジャポニスム期のフランスにおける日本陶磁器コレクションの形成
 ——日本陶器への開眼と交易の展開——

論文要旨

本論は、19世紀後半のフランスにおける日本陶磁器コレクションの形成について、当時の西洋を席卷したジャポニスム（日本美術趣味）の流行を巡る文化的・社会的・経済的な諸活動との関係から、その過程を捉えることを目的として執筆された。本文は2部構成になっており、第1部では、ジャポニスムの時代にフランスで収集された日本陶磁器コレクションの特色について考察を行った。また第2部では、フランスにおける日本陶器の収集を促した当時の文化的・社会的・経済的な背景を、主に交易の観点から考察した。

まず序章では、本論執筆の出発点ともなったフランスにおける陶磁器のジャポニスムについて確認する。ジャポニスムの時代におけるフランス陶磁器の造形表現は、日本美術の影響の下で大きな変化を遂げたが、その変化は極めて大まかに言えば、1870年代まで主流

であった絵付と装飾にみる日本美術の影響から、1880年代以降に顕著となるマチエール・釉薬・フォルムなどの陶磁器特有の造形表現にみる影響へと進展していく過程であった。19世紀末にフランスの作陶家によって盛んに制作された作品には、釉薬の流し掛け効果や歪んだフォルムに代表される日本陶器が備える遊戯性、あるいは、日本の茶道具に酷似したフォルムのものが突如として現れる。こうした造形表現上の大きな変化が出現する背景には、フランス人作陶家と日本陶器との直接的な出会いがあったと考えられるが、日本に渡ることがなかった彼らがフランスで実見できた日本陶磁器は、当時のフランスで収集されていたものに違いない。

そこで第1部では、19世紀後半のフランスで収集された日本陶磁器コレクションについて、その個々の内容を分析する。特に第1章では、主に目録調査を踏まえた分析によって、個人コレクションと博物館コレクションに分けて各々の特色を検討したが、それら双方に見出せるコレクションの一般的な傾向は、磁器に代わって陶器の収集数が著しく増加していることであった。また当時の個人コレクションは、収集品の特色や収集時期の点からおよそ3つのタイプ、1) 陶磁器研究から出発したコレクション（主に1850年代から1860年代に収集）、2) 日本趣味から出発したコレクション（1870年代から1880年代を中心に収集）、3) 日本陶磁器の特定の要素に執着したコレクション（1880年代半ばから20世紀初頭にかけての収集）に大別できる。そして、タイプ1) に比べて、タイプ2) とタイプ3) のコレクションでは陶器と茶道具が極めて数多く収集されており、またそれらの焼物が、西洋人の嗜好に合わせて制作されたものではなく、日本の日常生活文化の中で使用されてきたものであったことが判明した。

第2章1節では、当時のフランスで開催された展覧会の記録から、個人コレクションの公開状況について検討する。フランス人収集家によって日本陶磁器が出品された展覧会としては、1878年のパリ万博、1883年の日本美術回顧展、1897年の陶磁器博覧会の3つが挙げられるが、出品者や出品物の内容、および展示品の分類方法などに違いが認められる。これら3つの展覧会を比較検討すると、フランス人収集家による段階的な日本陶器受容の過程を確認することができる。とりわけ1897年の陶磁器博覧会では、日本の茶道具を大々的に披露しようという主催者側の意図が顕在化しており、またここでの展示においては、日本陶器を出品者である収集家別に展示するのではなく、産地別あるいは著名な作陶家別に分類するという画期的な分類方法が採用されていた点が注目される。そしてこの展示方法には、19世紀末における収集家の関心の在り処のみならず、ジャポニスムの時代のフ

(注) 3,000~6,000字(1,000~2,000語)でまとめること。

ランスにおける日本陶器研究の成果を読み取ることができる。19世紀末に顕著となる収集家の茶道具（茶碗・茶入・香合・水指など）への関心は、歴史上フランスで初めて日本の茶道具の美的価値が理解されたという事実の証明であるが、しかし、彼らは手許に集めた茶道具を日本の茶人のように喫茶の道具として用いることは殆どなかったようである。この点に触れながら続く第2章2節では、異文化理解の観点から当時のフランス人収集家が日本陶器へ向けた眼差しについて考察する。概して彼らは、茶道具を含む日本の陶器に見る様々な造形表現に斬新さを見出していたが、彼らによって熱心に収集された多くの作品は、主として鑑賞ないし室内を飾るための道具、あるいは彼らの知識欲を満たすための研究材料（標本）として活用されていた。茶陶の美は、フランス人がそれまで見過ごしていたものの発見であることに違いはない。しかし、茶を点てることやそれを喫することにはそれほど関心を示していなかった当時のフランス人収集家は、収集家としての茶人の姿からは大いに学んでいたと思われるが、日本における茶の湯の文化を受容してそこでの茶道具の用途を十全に理解するには至っていない。よって彼らは、茶陶を使う道具としてよりは専ら鑑賞の道具として見なしていたのであり、そこに日本における本来の機能から離れた用途、つまり、彼らなりの茶陶の用途（オブジェ・標本）を見出していたと考えられる。

このように第1部では、ジャポニズムの時代のフランスで形成された日本陶磁器コレクションにみる一般的な特色が、陶器および茶道具の収集数の増加であることを確認した。この結果を受けて第2部では、同時代の日本陶器をめぐる交易について、日本とフランスの両方の立場から検討を加える。

最初の第3章では、19世紀後半のヨーロッパにおいて最も信頼できる日本陶器の研究者として知られていた蜷川式胤に注目し、日本陶器に関する彼の研究書『観古図説陶器之部』が西洋の愛陶家に与えた影響について検討したが、この蜷川の著作は、最初から海外輸出を目的として刊行された可能性が高いことが判明した。その理由としては、図版が数多く付いた外国人にも分かりやすいヴィジュアル効果の高い書物であったこと、フランス語とドイツ語の翻訳書が付属してそれらが日本語の原書と揃って直ちに海外輸出されていたこと、海外輸出されたタイミングが西洋において日本陶器の需要が高まる時期に呼応していたこと、さらに同書の中で蜷川が海外の人の目を意識してこの著作を刊行していたことが記されていることなどが挙げられる。

そして続く第4章では、日本の開国後に活況を呈することになった日仏間の交易活動の中から陶磁器に関するものに注目し、フランスにおける日本陶器の需要の高まりを促した

主な外在的要因について、時系列に沿って考察する。1節では、日本からアーレンス商会がパリの美術商ビングへ向けて日本の美術工芸品を輸出していたこと、1876年から1878年にかけての3年間にアーレンス商会が、工芸品の中でも日本陶磁器の製造と輸出に特に力を入れていたこと、さらに、それと全く同じ時期に『観古図説陶器之部』がアーレンス商会によって海外輸出されたことなどの事実を解明することができた。そしてこれらの事実からアーレンス商会は、フランス市場の動向を十分に理解・予測しうるビングと共同して、フランス市場で戦略的に日本の陶器を普及させることを企図していたと推測されうる。また2節では、1878年のパリ万国博覧会へ日本側から出品された日本の古陶磁が、フランス人の日本陶磁観を大きく変化させる転機となったことを確認した。それまでフランスで認識されていた日本陶磁器は、日本的なモチーフや精緻な技巧を特色とした装飾性豊かなもののばかりであり、その大方は磁器であったが、1878年の万博で展示された作品の中には、地味な焼物や幅広い色調の釉薬が掛かる陶器、あるいは歪んだフォルムの焼物などが含まれていた。それが刺激となって、その後のフランス人はそれまで以上に奥行きをもって日本陶磁器を眺めるようになり、また収集家や作陶家の間では、日本陶磁器の歴史、日本の磁器と陶器の差異、および陶器の造形表現に関する探究が盛んに行われるようになった。また3節においては、1880年代のフランスでは一般の人々と収集家の双方の間で、日本陶磁器に関する大きな趣味の変化が見られたことを確認した。1880年代に入ると西洋の市場では、華美な装飾を施した陶磁器に代わって地味な陶磁器が好まれるようになり、特にフランスでは古い土器に似せて作られた非常に簡素なものが好んで買い求められるようになった。また一方で、奇遇にもこれと同じ頃にフランスの収集家たちによって形成された日本陶磁器コレクションの中には、磁器よりも陶器、そして特に茶道具が頻出するようになった。1880年代には、蜷川の著作『観古図説陶器之部』が本格的にフランスに普及し始めると共に、日本滞在中に蜷川に直接師事した米国人のモースが3度パリを訪れているが、蜷川の著作やモースを通して知りえた日本陶器に関する広範な知識は、パリの収集家たちの収集熱を一層掻きたてることになった。また、収集家が日本の陶器や茶道具に関する理解を深めていく際には、当時パリに滞在していた日本人が貢献している場合があり、とりわけ画家ラファエル・コランとパリで活躍した美術商の林忠正、および彼に師事した日本人の弟子たちとの交友は、波好みの焼物で構成されたコランの極東陶器コレクションの形成に無視できない影響を与えた。よって4節では、1880年代半ばから開始されたコランの極東陶器の収集活動を、彼の周囲にいた日本人との交流の観点から検討する。

(注) 3,000~6,000字 (1,000~2,000語) でまとめること。

(注) 3,000~6,000字 (1,000~2,000語) でまとめること。

最後に第5章1節では、およそ1860年代から1900年代にかけての間にジャポニズムの流行を経て大きく変化した、フランス人の日本陶磁観の変遷について纏めた。日本陶器へ開眼した1878年、日本陶磁器の全体像の把握に関心を示した1883年などの節目を経て、磁器が中心であったそれまでのフランス人の日本陶磁観は、陶器偏重と言っても過言でない程にすっかりと様変わりした。とりわけ1880年代は、フランス人の日本陶器に対する関心が一気に高まった時期として認識され、彼らの日本陶器へ寄せた情熱は当時のコレクションに見事に結実した。さらに第5章2節では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本の陶芸から大きな刺激を受けて制作したフランス人作家の作品について考察する。マチエール、釉薬、フォルムに特色のある日本の陶芸作品には、西洋の芸術の枠組みにとらわれない自由な造形表現が見られるが、その魅力の虜となった作家の代表がシャブレとカリエスである。前者はハヴィランド社がパリに築いた実験工房や晩年に身を落ち着けたパリ近郊の町などで、日本陶器、フランスの地方で制作されていた炆器、中国磁器などから着想を得て、主にバルボティエヌ（泥漿・着色陶土・糊状陶土などと訳される）、釉薬、炆器などの研究に没頭した。またカリエスは、1878年のパリ万博の際に見た日本の古陶磁、あるいは友人の日本陶磁器コレクションから刺激を受けて、フランス中部のニエーブル県ピュイゼー地方にある古くから陶器制作が盛んであったサン＝タマン村に工房を築き、同地の陶器からも影響を受けながら、炆器のマチエール、釉薬、フォルムに特色のある焼物の研究・制作に専心した。また、シャブレやカリエスの作品は多くの追随者を生んでおり、彼らの他にも世紀末には、日本陶器から創作の着想を得た作家は数多く存在した。そして、それらの作品群は現在、アール・ヌーヴォー陶磁器と呼ばれている。その特長としては、流し掛けた釉薬の効果、動植物などの自然の形体を模したフォルム、歪んだフォルム、肌理とその色が醸し出す重厚感に魅力がある炆器のマチエール等を挙げることができるが、それらは日本の陶器から学びえた要素でもあった。また、フランスのアール・ヌーヴォー様式の作品（工芸品や家具など）は、一般にパリとナンシーを中心にして制作されていたが、こと陶磁器に関してはパリ近郊の町や村、あるいはサン＝タマン村などにも主な制作拠点があった。そのため、過去のフランスの伝統を否定して新しい表現を求める（反歴史主義）、異文化を積極的に摂取する（インターナショナリズム）、自然から有機的なフォルムを学ぶ（自然主義）など、今日認識されているアール・ヌーヴォー様式の特色に加えて陶磁器のそれには、古くから地方に根付いている文化を発見・回顧する（地域性）という特色も確認できるであろう。

（注）3,000~6,000字（1,000~2,000語）でまとめること。

以上のように本論の考察では、19世紀後半のフランスでは、磁器に代わって日本の陶器が新に注目されて数多く収集され、そうした観者によって受容された日本陶器が、当時のフランスで活躍する制作者の創作活動にも大きな影響を与えていた事実を理解することができた。さらに、こうしたダイナミックな一連の動きの背景には、日本陶器の受容を促す当時の様々な交易活動が外在的要因として極めて効果的な働きをしていたことも確認できた。茶陶を含む日本の陶器は現代のフランスにおいても高く評価され、またそれから影響を受けて亀裂釉や流し掛け釉薬、あるいは茶陶のフォルムなどを採り入れた作品を制作する現代作家も存在する。そのため、日本陶器に見る独自の造形表現への理解・関心は、何もジャポニズムの時代に限定されるものではなく、それは現代のフランス文化にも確かに根付いていることが分かる。しかしながら、一時的なものに終わらずに、今尚生き続けているフランス人のそうした関心は、他でもないジャポニズムの時代から始まっているのである。

（注）3,000~6,000字（1,000~2,000語）でまとめること。

論文審査の結果の要旨

氏 名	今 井 祐 子		
論文題目	ジャポニスム期のフランスにおける日本陶磁器コレクションの形成 ——日本陶器への開眼と交易の展開——		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	吉田 典子
	副 査	教授	三木原 雅
	副 査	教授	小高 直樹
	副 査	国際日本文化 研究センター 助教授	稲賀 繁美
	副 査	京都工芸繊維 大学 助教授	植田 豊次郎
要 旨			
本論文は、19世紀後半のフランスにおいて、ジャポニスムの流行下で形成された日本陶磁器コレクションの実態を把握するとともに、その形成にあたって重要な役割を果たした文化的・社会的・経済的な諸活動を明らかにし、日本の陶器がフランスに受容される過程を、主として日仏の交易史の観点から調査研究したものである。 本論は2部から構成される。第1部はコレクション研究であり、19世紀後半のフランスで形成された主要な日本陶磁器コレクション（個人および博物館）の実態調査である。今井氏はそれらが収集品の特色や収集時期の点からおよそ3つのタイプに分類されること、またそこには磁器から陶器へ、装飾性に富んだものから茶道具のような比較的地味なものへという趣味の変化が認められることを、綿密な資料調査によって実証した。さらに当時のフランスで開催された3つの日本陶磁器の展覧会を比較検討することによって、フランス人収集家による段階的な日本陶器受容の過程を確認するとともに、彼らが熱心に収集した茶道具が、本来の用途よりは、観賞用のオブジェや研究用の標本として扱われていたことを示した。 第2部は、フランスでの日本陶磁器に関する趣味の変化を促した社会文化的背景の考察であり、日仏の交易史である。ここでは、欧米の陶磁器コレクターに大きな影響を与えたとされる蜷川式胤の『観古図説陶器之部』（1876-79）の特色と反響、この書物の翻訳と輸出に関わったと見られるドイツ系商社アーレンス商会の活動、1878年のパリ万博における日本の古陶磁の展示とその影			

影響、1880年代のフランスにおける蜷川の著作の普及と、蜷川に直接師事した米国人モースとパリの収集家たちの交友、日本陶磁の収集家でもあった画家ラファエル・コランと美術商の林忠正や日本人の弟子たちとの交友などの調査研究を通じて、フランス人の間に茶陶を中心とする日本の焼き物についての関心と理解が深まっていくさまが跡づけられる。そして、マチエールや釉薬、フォルムに特色を持った日本の陶器が、フランス人作家陶家に創作のインスピレーションを与えるに至ったことが論じられる。

本研究の意義は、従来のジャポニスム研究において、絵画に関する研究に比べて遥かに立ち遅れている工芸とりわけ陶磁器のジャポニスムに焦点を当てていること、しかも芸術上の問題のみならず、収集や展示などの個人的・社会的な活動や、日仏の交易活動、書物の流通、人的交流等に着目し、ジャポニスムをより広範な社会文化的背景の中に位置づけて考察していることにある。

先行文献については、日本とフランス、および英米の文献に関して、一次資料・二次資料とも十分に網羅されており、それらを踏まえた上で、数度の現地調査をおこなって書き進められた本論文は、とりわけ次の6点において、きわめて新しい知見を提供している。

- ① 19世紀にフランスで形成された日本陶磁器コレクションの多くは、現在散逸しているが、主として各種の目録に基づき、その内容物に関しての綿密なデータを作成し、可能な限りの現地調査をしてその実体を明らかにしており、それに基づいて磁器から陶器へ、装飾的・技巧的なものから、茶道具を中心とした収集へという趣味の変化を実証的に跡づけている点。
- ② 近年その役割が注目されつつある明治初期の官俵で、日本の古美術に対して博物学的な視点を導入した蜷川式胤とその著書『観古図説陶器之部』（1876-79）が、欧米の収集家に与えた影響に着目し、この書物の印刷や出版に纏わる状況、書物の特徴とその意義、欧米での受容の過程と反響について詳しく考察している点。
- ③ これまであまり実体の知られていなかったドイツ系商社アーレンス商会の活動について調査し、上記蜷川の『観古図説』の翻訳・出版に深く関与したこの商社が、同じ1876年から78年の時期に、日本で陶工を雇っての陶磁器製造や輸出向け陶器の買い付けをおこなっていた事実をつきとめ、取引先であるフランスの美術商ピングと共同して、フランス市場に戦略的に日本の陶器を普及させる企図を持っていたことを説得的に推論している点。
- ④ 1878年のパリ万博における日本の陶磁器の展示状況を再構成し、商業展示とは別個におこなわれた日本の古陶磁の展示が、収集家や作家陶家に大きなインパクトを与え、日本陶磁器に関する趣味の変化に重要な影響を与えたことを論じている点。
- ⑤ ビュルティヤゴンス、コランなどフランス人の陶磁器収集家、ピングなどの収集家兼美術商、アメリカ人の収集家モース、日本人の美術商林忠正や留学中の画家たちなどの活動と交流関係に着目し、彼らが日本陶磁器に関する情報の流通に果たした役割を論じている点。
- ⑥ 上記の研究を踏まえて、およそ1860年代から1900年代にかけてのフランスにおける日本陶磁器観の変遷を整理し、独特のマチエールや釉薬による偶発的な美、ゆがんだフォルムなどの特色を持つ日本の陶器が、フランス人作家の造形表現に与えた影響を明確にしている点。

以上のように本論文は、陶磁器のジャポニスム研究において、数多くの実証的な成果をもたらしている。もちろん、それぞれの論点において資料の調査や論旨の展開が不十分な場合もあるが、それらは今後の研究課題として、さらなる発展が期待されるものである。

本研究は、ジャポニスム期のフランスにおける日本陶磁器コレクションについて、その特徴と形成過程を研究したものであり、フランスにおける趣味の変化を促した日仏間の文化的・社会的・経済的交流の具体的諸相について、重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。

よって、学位申請者の今井祐子は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

最終試験の結果の要旨

氏 名	今 井 祐 子		
試験科目	専門科目	テキスト・イメージ文化論	
		市民文化表象論	
		図形メディア情報論	
		近代文化交渉史	
		近代工芸史	
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	吉 田 典 子
	副 査	教授	三 木 原 浩
	副 査	教授	小 高 直 樹
	副 査	国際日本文化研究センター助教授	稲 賀 繁 美
	副 査	京都工芸繊維大学助教授	樋 田 豊 次 郎
要 旨			
本審査委員会は、今井 祐子 の提出した「ジャポニスム期のフランスにおける日本陶磁器コレクションの形成——日本陶器への開眼と交易の展開——」について、これに関連ある専門科目について口頭試験を行い、下記の結果を得た。 実施日 平成16年2月23日 専門科目 「テキスト・イメージ文化論」 図版に当時最新の石版画技術を用いる一方で、手彩色を施すという特徴を持ち、また日本の従来の陶器研究に対してこれまでにない博物学的な視点を導入した蜷川の『観古図説陶器之部』のイメージとテキストが、どのような点で欧米の収集家に評価されたのかについて質問したところ、明治初頭の時代にあつて、新旧のパラダイム転換期に位置づけられる蜷川の著作の特性を十分に認識した上で、明確な見解を示した。			

専門科目 「市民文化表象論」

1880年代以降、茶器・茶道具の輸入増加に表象される当時のフランス人ブルジョワの心性について質問したところ、当時のフランス人が日本の茶の文化をどの程度理解していたかという観点から明快な説明が得られた。

専門科目 「図形メディア情報論」

コレクションの調査を主としてフランス語の目録に基づいて行ない、数量的なデータとして提示しているが、目録の信頼性や妥当性に関して、どのような点に留意したかについて質問したところ、目録の記述を読みとる上で注意すべき点や、目録による調査の限界を十分に認識した上で、研究を遂行していることが明確になった。

専門科目 「近代文化交渉史」

輸出産業としての陶磁器の動向と、美術骨董としての収集の動向の差異について質問したところ、両者を短絡させることの危険性を十分に認識していることを示した。また磁器から陶器へと嗜好が変化したことについての今井氏の立証は貴重であるが、日本起源の陶器と世紀末のアールヌーヴォー陶磁器やゴッダンの「火の芸術」としての陶器観との関連、さらには20世紀に入ってから岡倉天心の『茶の本』の受容との繋がりについて質問したところ、十分な理解を示した上で、今後のさらに広い文化史的課題として受けとめられた。

専門科目 「近代工芸史」

フランスにおける日本陶磁器の趣味の変化において、磁器から陶器へ、花瓶や鉢から茶道具へという大きな流れが確認されたわけだが、この変化において、日本側が、日本文化の技巧的・細工物的なイメージを訂正し、より深い伝統文化を相手に伝えていく「戦略」をどの程度意識していたのか、フランスにおける趣味の変化には日本側の問題がどのように反映されていたのかについて質問したところ、問題の重要性を十分に認識していることを示し、論点を正確に説明した上で、今後の重要な研究課題であることを示した。